

Ⅲ 1995年度の調査研究

1. チームAの調査研究

日米のごみリサイクルの比較

2. チームBの調査研究

やってみよう / アメリカと日本の子どもたちの遊び

～多民族の伝承遊びの内容とその背景～

3. チームCの調査研究

循環する水と人々の暮らし

4. チームDの調査研究

青少年の非行防止のための教育

～禁煙教育を中心として～

5. チームEの調査研究

「平和」を支える真の国際理解

6. チームFの調査研究

住みやすいまちづくりを求めて

～日米の都市環境の比較を通して～

日米のごみリサイクルの比較

広島市立千田小学校	武智 正紀
東広島市立西条中学校	中森 英雄
広島市立城山中学校	原 みよ子

1 はじめに

日本においては、都市の過密化に伴いさまざまな問題が生じている。地域コミュニティの空白、住宅、交通等、経済大国としては解決して行かなければならないことが多いが、なかなか解決の糸口がつかめないのも実情である。そうした中で、環境保全の意識は進んでいるものの一つにあげられよう。私たちは「アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究」にあたって、環境保全について日米でどのような共通課題があるかを調査し、教材化することにした。

その具体的な方法として、児童・生徒にとっても身近なごみのリサイクルの方法について調査してみることにした。

日本においては、自治体によってその方法は若干異なるにせよ、ごみの処分は焼却・埋め立て・リサイクルの3つの方法を取っている。ところがリサイクルは、住民の協力、処理の効率化、リサイクル物資の受け入れの歯車がかみ合わないとうまく運ばない。特に、リサイクル物資が経済的に成り立たない時期は、ともすれば厄介物として扱われたりすることもある。

地球環境保全の立場からすればどうしても必要ではあっても、経済か環境か選択を求められることがある問題である。アメリカにおいては、この問題がどう考えられているのかを調査し、日米の比較を教材化してみることにした。

2 方法

- アメリカの大都市であるミネソタ州のミネアポリス市、セントポール市と地方都市であるノースカロライナ州のグリーンビル市でのごみ処理（特にリサイクル）に関わって、都市規模による処理方法の違い
- リサイクルのためのシステムのあり方
- リサイクルするにあたって住民や企業の協力の様子
- ごみ処理に対するボランティア活動の実態

以上の点を解明するため、ミネソタ大学・イーストカロライナ大学の協力を得て、清掃事業に携わる人々からの聞き取りや施設の見学を行うことにした。

3 調査の日程

日 時	場 所	内 容	協力者
8/8 妨		ミネアポリス市ホテルラクスフォード着	
8/9 9:15	ホテル ラクスフォード	朝食会 ミネアポリスにおける2日間の現地調査のパートナーであるR.ワンゲン氏と打ち合わせを行う。	R ワンゲン氏
8/9 11:45	モール オブ アメリカ	リサイクルショップを見学し、話を聞く。 地下のごみ収集場を見学し、分別収集の方法について話を聞く。 モールの中にあるパブリック ハイ スクールを見学し、ミネソタ州の新しい教育制度について話を聞く。	K カーソン氏 K カーソン氏
15:00	R ワンゲン氏宅	家庭におけるごみ処理について見学し、話を聞く。	R ワンゲン氏
8/10 8:10	スーパー サイクル	リサイクルできるものを集めて、それを分別し、他の業者に売っているのを見学する。	P ワンダー氏
10:00	サ リサイクリー	BFIのリサイクルセンターで、企業から出るゴミのリサイクルを行っているのを見学する。	S フェン氏
13:30	リソース リカバリー	第3セクター方式の会社で生ごみを処理し、火力発電所の燃料として売っているのを見学。	G 柯イト氏
8/11	ワシントン D C	ミネアポリスからワシントン D. C. へ移動 ホテル セントジェイムス着	
8/12	ワシントン D C	各チームごとに現地調査	
8/13	グリーンビル市	ワシントン D. C. からグリーンビル市へ移動 ホテル ヒルトンイングリーンビル着	
8/14 9:45	ロック スプリング乗馬クラブ	D. スペンス氏より、挨拶と計画の概要説明がある。	D スペンス氏
11:00	ロック スプリング乗馬クラブ	グリーンビルにおける3日間の現地調査のパートナーであるH. ハジンス氏、J. スウォープ氏と打ち合わせを行う。	H ハジンス氏 J スウォープ氏
13:00	ECUの図書室	州の教育指導課程について、ごみ処理の問	

		題がどのように扱われているかを調べる。	H ハジンス氏
8/15 9:00	グリーンビル市の環境衛生局	市のごみ収集のシステムの説明を受ける。 敷地内にあるリサイクル用のごみを入れる コンテナボックスについて話をきく。	J ハフソフ氏 D ダニエ氏
8/15 9:50	グリーンビル市内	市の回収車が、どのようにごみを回収して いるかを見学する。	J ハフソフ氏 D ダニエ氏
10:10	ECVC	ピット郡のリサイクルごみが集められ、障 害者を雇い、それを分別し、売られている。	J ハフソフ氏
11:00	ピット カウンティ リサイ クル センター	ごみ収集車が回ることができない地域の人 々が、持ってくるごみの集積場を見学する。	J ハフソフ氏
11:20	埋立て地	主に生ごみを埋め立てている処分場を見学す る。 (各家庭でのホームステイ)	J ハフソフ氏
8/16 9:30	フリー ウェー	アドプト ア ウェーの看板の写真を撮り、 その意味の説明を聞く。	J ラター氏
10:00	ジェリー氏の養鶏場	鶏の糞とピーナツのからを混ぜて肥料にし 有機農業をしている養鶏場を見学し、話を 聞く。 (ウエルカムパーティー) (各家庭でのホームステイ)	J ラター氏 L ストリー氏 J ストリー氏
8/17 9:00	J ボンダー氏宅	リサイクル (特にREUSE) について人 々の意識を高めるボランティア活動をして いるJ ボンダー氏より話を聞く。	J ボンダー氏 J ハフソフ氏
11:30	C M エクス ミドル スクール	中学校の施設を見学し、話を聞く。	K ゲットシンガー氏
8/18 9:00	ホテルヒルトンイン	終日 ホテルにおいて調査報告書の作成。 11:30~14:30までH.ハジンス氏よりアドバ イスを受ける。	H ハジンス氏
8/19		ECU (イーストカウチ付塔)の教室にて全体会。 調査の概要について報告。 フレンドシップパーティーの準備。	
10:00 午後			
19:00	H.ハジンス氏	フレンドシップパーティー	

8/20 午前 11:00	ローリー市	グリーンビル市よりローリー市へ移動。 デューク大学のチャペルにて日曜ミサ に参列。 ホテル ホリデーインローリーダーラム エアポート着。	
16:00		ノースカロライナ州教育調査団(9月来日後) との情報交換。	
19:00		教育調査団とのパーティー。	
8/21	ローリー市	飛行機のトラブルによりローリー市に 1日足止め。	
8/22		ローリーダーラム空港出発。 デトロイト空港経由で日本へ。	
8/23		関西空港到着(15:30) 広島着(20:00)	

4 現地調査の概要

(1) ミネアポリス市 セントポール市

① リサイクルショップ ナウ (モールオブアメリカ内のBFI経営のモデルルーム)

キム カールソン氏より様々な説明を受ける。ペットボトルやタイヤ、紙、ジーンズ(布)アルミ缶、スコップ、木材等からできた商品(飾り物、日用雑貨)の見事さに驚く。買いに来る人は、リサイクル運動に興味をもっている人が多い。このショップは、世界一の規模といわれるショッピングセンター内でリサイクルがどのように有効かをPRする役割を果たしている。



リサイクル商品と教えられない限り、ごく普通の商品に見える。ただし、価格は多少高くなっている。

② モール オブ アメリカの地下ごみ収集場

モール オブ アメリカは、年間4000万人の人が訪れる巨大ショッピングセンター

のため、出てくるごみも膨大な量である。ショッピングセンター内には、それぞれ種類ごとのごみ箱がおかれており、そのPRも徹底していた。また、ごみ箱の種類ごとにきちんと捨てられている様子から、買い物客の協力もうかがえた。

これらのごみは、すべて地下室に運ばれ、種類ごとに処理場に運ばれる。その巨大な集積場の規模には驚かされた。この施設はすべてBFIという民間のごみ処理会社の経営である。この会社は、全国規模の会社であり、企業から出るごみ処理を担当している。

③ パブリック ハイスクール (モール オブ アメリカ内に設置)

ミネソタ州の新しい教育制度についてナンシー カツマレック氏より説明を受けた。選択科目によっては、学校から離れた場所で実務教育を受ける施設である。そのためモールオブアメリカ内にもこの教室をそなえている。人気のある教科はパソコンのインターネットや商業科目である。リサイクルショップにも、この学校の実務教育として店頭での実習が行われていた。

また、学区の自由化が実施されていた。このプランを実施するとき、特定の学校に集中することも予想の枠の中に入れておいたが、実際は、10%程度の生徒がこの制度を利用しているだけとのことである。この理由は、学校までの距離が大変長くなることや、公立学校では、日本のように受験のための有名校といった意識が少ないことにも原因があるようである。

④ ワンゲン氏宅

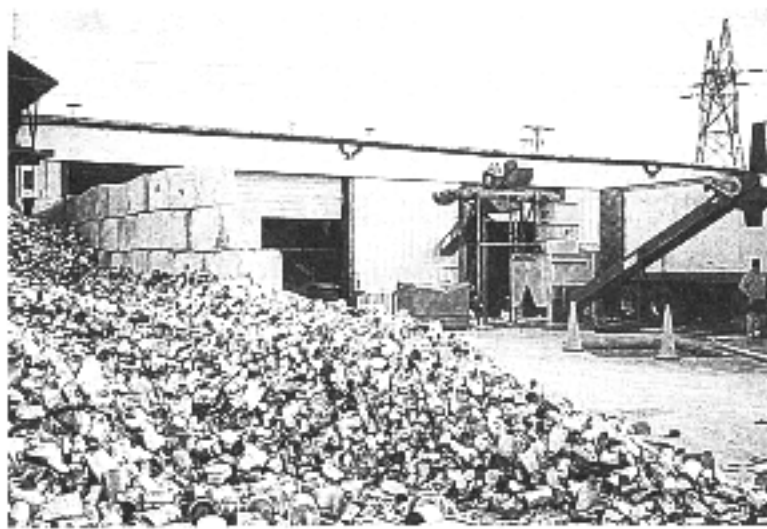
家庭でのごみ処理の実態を見学した。台所の生ごみは、ディスポーザーを使用し、ほとんど下水処理に回している。このシステムはグリーンビルのような小都市でも普及しており、これが日本とアメリカの家庭から出るごみの種類の大きなちがいである。また、週に1度、縦・横・高さ70×80×100cmの大きさの車輪付きのダストボックスを家の前に出すことになっている。別にリサイクルできるカンごみなどを出すボックスもある。これらは、市の供給物である。下水道、ごみ処理代として月に3000円ほど各家庭で負担している。これらのごみの収集は市から委託された民間業者が当たっている。

⑤ スーパー サイクル (リサイクルごみ収集会社)

ペギー ワンダー氏より説明を受ける。

この会社は、リサイクル出来る物のみセントポール市及びその周辺地域から集めている。住民が直接この会社にもってきてよく、その際、アルミ缶のみその量に応じて代金が支払われている。集めている物は、紙類(雑誌等・ダンボール・新聞の3種類に分別されて集められる)缶、ビン、プラスチック





クである。この会社の経営が成り立っているのは、そのときの資源ごみの価格差を市の補助金で賄っているからである。

ここに持ち込まれるごみのうち99%はリサイクルできるそうであり、住民の分別収集に対する意識、協力の高さがうかがわれた。

⑥ ザ リサイクリー（BFIのリサイクルセンター）

シェリー フェン氏より説明を受ける。企業から出る資源ごみのリサイクルセンターである。5年前にできた。このような施設を全米に75持っている会社である。分別はベルトコンベヤーに乗って流れてくる物を手作業で行うわけだが、若い人も多く働いていた。

企業から出るごみは住民ほどの協力は得られず、95%のリサイクル率である。リサイクルできないごみは、埋め立てに回されている。

⑦ リソース リカバリー（ごみを燃料に変える会社）

ガリー ホワイト氏より説明を受ける。分別されていないごみを、オートメイションで燃えるごみだけを取り出し、発電所の燃料に変えている施設である。この会社は民間と行政で設立した第3セクターである。従来、こうしたごみは埋め立て処分されてきたが、埋立地の不足と水質の汚濁の恐れから、新しい処理方法を行っているパイロットプランである。

アメリカにおいては、生ごみ（リサイクルできないもの）はほとんどが埋め立て処分されているわけだが、ここにも活用の方法が考えられようとしている。燃料の質としては、石炭よりはカロリーは低いが発電するための熱源として利用価値はあるとのことである。また、匂いもあまりないとのことであった。日本における生ゴミは台所から出る湿ったごみが主であるが、アメリカにおけるそれは、ディスポーザーの普及により乾いたごみが主のため可能な処理方法である。この先進的な処理方法は、セントポール市とその周辺から収集されたものであり、この会社の最終目標は、埋立地にごみを送らないようにすることとのことである。

(2) グリーンビル市

① 家庭ごみの収集車

環境事業に携わっているジョイス ハドソン氏にグリーンビル市のごみ収集システムについてインタビューし、現地の案内もしていただく。

決まった日にそれぞれの種類のごみを家の前に出しておくのは、日本と同じであるが、車輪付きのダストボックスはリサイクルできるごみとそうでないごみを入れるものとは色分けしてあった。このボックスは市から個人負担で住民が買うことになっている。（大56ドル 小49ドル 補助金なし）



決まった日に家の前に出すのが通例であるが、リサイクルごみのボックスは、家の裏庭にそのままおいてあっても、収集に携わる人がそこまで行って収集車まで運ぶことになっている。これは、リサイクルごみの分別収集に協力してもらうための市のサービスとのことである。日本の収集作業の効率から考えると悠長ではあるが、1日に300軒回ればよいとのことであった。

② リサイクル分別所 (E. C. V. C.)

障害者のための作業所で、人件費も含めてこの施設運営の経費は、資源ごみの売上で賄っている。グリーンビル市のリサイクルの特色は、再生資源として値打ちのあるもののみ取り扱っていることである。すなわち、アルミ缶、スチール缶、紙類、ペットボトル等の固いプラスチック類のみである。また、大型ごみもここで分解し、スチールを回収していた。



③ ピットカウンティー リサイクルセンター (農村地帯のごみ集積場)

農村地帯でごみの回収車がまわれない地域は、上記のセンターがある。ここは、リサイクルのできる物及び生ごみを住民が各自持ってきて入れられるコンテナがあり、管理人も1名常駐していた。実際に住民が車までやって来て入れる場面も見る事ができた。ピット郡にはこのような施設が16カ所あり、農村地帯まで、リサイクルの精神が徹底しているのには感心した。

④ ごみの埋立地

グリーンビル市では、ごみの処分は、リサイクルのできる物以外は、すべて埋め

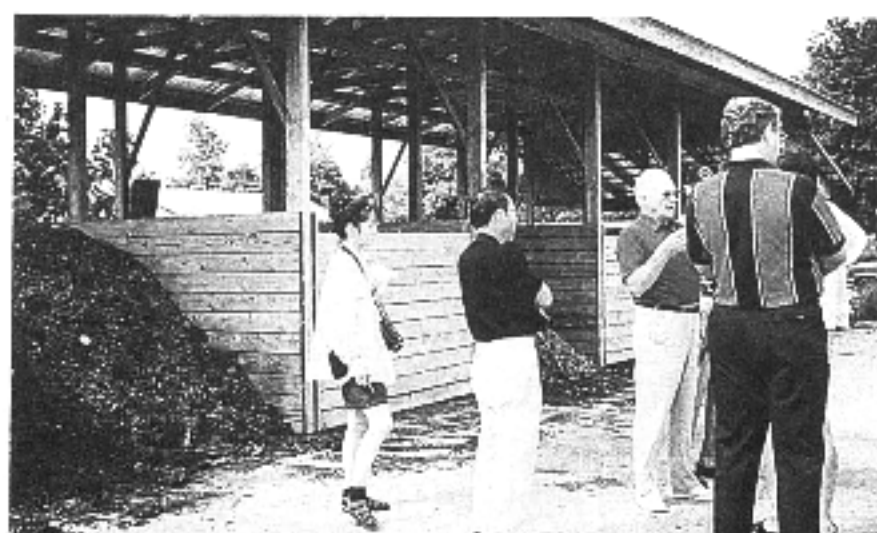
立て処分している。この町でリサイクルに熱心に取り組み出したのはこの埋立地の土地不足が根底にあるとのことであるが、我々日本人の感覚でみると、農村地帯のグリーンビル市では、どこにでも無限に近く土地がありそうであるが、国民性の違いを感じた。

処分の方法は、平地にごみを積み上げ土とサンドイッチにしていくわけだが、そのためまさしくごみの山が出現することになる。地下水の汚染対策の施設も見えず、実に大らかな埋立処理の方法に見えた。この埋立地は、満杯になると役に立たない土地として放棄されるとのことであった。

⑤ 農場におけるリサイクル

大規模に（20万羽以上）にわとりを飼育している農場では、出てくる糞と、同じく農場で生産したピーナツの殻や木片とを混ぜ合わせて堆肥を作っている。この堆肥で1000エーカー以上の農場の肥料をすべて賄っているとのことである。すなわち、化学肥料を使わないパイロットプランとして始めたとのことである。有機農業は手がかかるといわれるが、コンピューター管理と機械化により、家族だけで大農場が管理できるとのことである。

廃棄物を一切出さない方式は、環境保全に最も適した方法といえよう。



⑥ ボランティア活動



リサイクル運動を広げるために連邦政府は、児童・生徒向けにパンフレットを作り、要請があれば各地に無料で送っているしビデオも製作している。また、教師用のカリキュラムも作成している。

こうした全米的な動きの中で、グリーンビル市では、ハドソン氏、ボンダー氏らによるボランティア活動があげられる。このグループは、学校や企業などからの要請があれば、出かけてリサイクルの必要性について話をしている。

学校では社会科の時間だけでなく、科学の時間などでもリサイクルの学習を進めている。これらの教育にこのグループは教師にアドバイスし、授業に参加するなどして大きな役割を果たしている。

また、ごみは再利用できるとの考えから、このグループは、廃棄されたものをそのまま再利用して装飾品などが作れることをアピールしている。また、再利用フェアを定期的にかけて児童生徒、地域住民学習を作った様々な作品を展示しリサイクルについての意識高揚に努めている。

ピット郡においてはリサイクルではないが、地域の環境保全の立場から、フリーウェイでの清掃活動をするボランティア集団もある。『アダプトウェイ』とよばれるこの団体は、フリーウェイで担当地域を定め、そのことを道路に看板を立てて表明し、年に4回ほど清掃活動を行っている。



こうした活動が、ごみリサイクル運動にも重要な役割を果たしており、市当局によると住民の2/3はリサイクル運動に協力的とのことである。

5 終わりに

国土の広さの違い、国民性の違い、生活様式の違いは、出てくるごみの種類に如実に現れてくることがわかってきた。

すなわち、台所から出るいわゆる生ごみは、ほとんどがディスポーザーで下水処理に回されているアメリカ→すべての家庭がそうであれば下水による汚濁の問題が日本では出てきそうだが、下水処理場の規模の大きさによって解決している。効率を求めれば便利そうである。

また、商店の過剰包装もなく、路上に自販機がほとんど無いアメリカ→日本の家庭から出てくるプラスチック系統のごみ処理の問題も路上の空き缶の問題も少なそうである。

リサイクルに回されないごみの処理は、埋め立処分に回されているが、腐敗するものの少ないために、地下水の汚染にあまり神経をとがらせているようには見えないアメリカ→国土の広さのため、埋立地にも不足はなさそうである。

ところが、リサイクル運動が熱心になってきたのは、大きな意味では、地球環境保全のためではあっても、直接的には埋立地不足が発端であると聞けば「おや」と考えてみたくなる。

われわれは、ミネアポリス市とセントポール市でリサイクルの最先端の方法を調査することができた。また、グリーンビル市では、日本と同じように行政が中心になった処理の仕方をしながらも、それに関わろうとする人々（ボランティア活動）の話から、行政に任せきりの日本と、住民が積極的に関わろうとする意識の違いを知ることができた。

しかし、ワシントンDCのような大都会においては、観光客が多いせいか、路上にごみ

が散乱している様子も見る事ができた。わずか3地域の様子でアメリカ全体を判断することはもちろんできないことではあるが、自治体によってかなりのちがいが出てきているのも確かなようである。

人間が産業活動を行い、文化的な生活を送ろうとすればするほど、ごみは出てくるものである。だとすれば、出てくるごみをできるだけ減らそうとすれば、リサイクルの発想が生じてくるわけだが、リサイクルの中には、リユース（再使用）も重要な意味があることをボランティア活動の中では位置づけられていた。

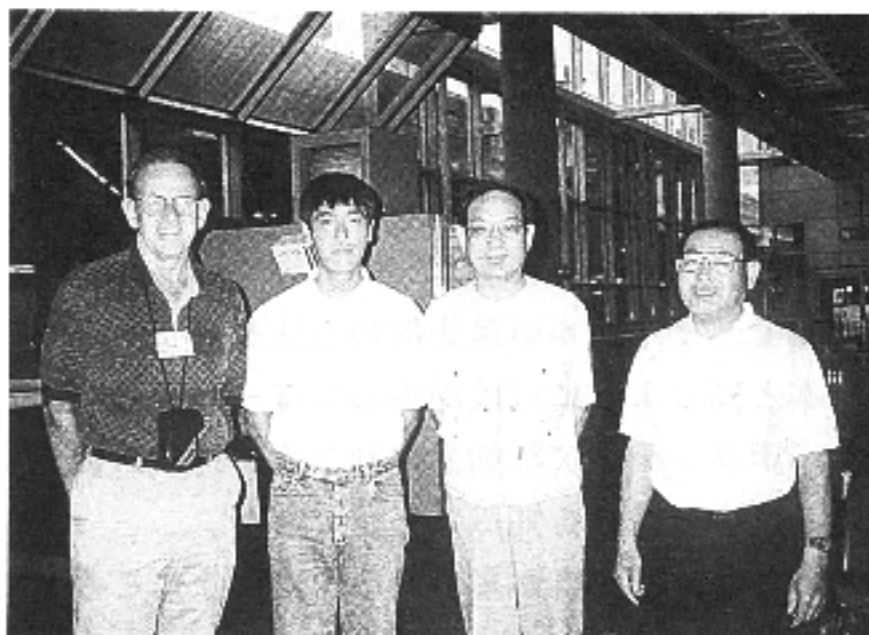
また、リサイクルは分別した資源としてのごみを再生利用するための流通機構がしっかりとしていなければならない。再生する方が経済的に高くつくことによって、この機構が停滞を起こしてはならない。こうした点も、完全に分別し、大量に再生工場に送ることによってリサイクルが定着しているように見えるアメリカの実情を見る事ができた。

環境保全という立場からは、狭い国土の中で、過密した都市を多く抱えた日本の方がより切実な問題である。しかし、ごみ処理は行政の仕事と割り切っている日本では、住民の協力や企業の責任をもっと認識していかなければならない。便利さだけ追いかけるのではなく、過剰包装を拒否できる住民の意識改革。企業には缶、ペットボトルなどのディポジット制度への協力や、企業から出る紙類は必ずリサイクルに回さなければならないというアメリカの規制を参考にするなど、住民や企業が一体になって取り組まなければならない。

われわれは、インタビュー先で「日本のごみ処理、リサイクルはアメリカよりも進んでいるはずだ」との指摘を何度も受けた。システムは整っていても町全体が協力できなければ効果は出てきにくいものである。ここに教育の必要性がある。そのために、我々の教材が少しでも役立てばと願っている。

研究協力員

ミネアポリス市	ミネソタ州教育省社会科専門官	Roger Wangen 氏
グリーンビル市	イーストカロライナ大学教育学部	Dr. H・C・Hudgins 氏
	同	副学部長 Dr. John・A・Swope 氏



やってみよう！アメリカと日本の子どもたちの遊び
—— 多民族の伝承遊びの内容とその背景 ——

広島大学附属東雲小学校 吉浦 公子
島根県三隅町立岡見小学校 洗川 玲子
島根県大和村立大和中学校 永田 祐治

1 研究テーマ 「やってみよう！アメリカと日本の子どもたちの遊び」
多民族の伝承遊びの内容とその背景

2 研究メンバー

(1) 日本側の研究員

広島大学附属東雲小学校教諭 吉浦 公子
島根県三隅町立岡見小学校教諭 洗川 玲子
島根県大和村立大和中学校教諭 永田 祐治

(2) アメリカ合衆国側のパートナー

セントポール・ヒルマーレア高等学校教諭 ケイティ・マクドナルド
イーストカロライナ大学継続教育研究所副所長 グレイグ・A・ヘイスティング

3 研究の目的

- (1) 日本の伝統的な遊びや背景をアメリカの子どもたちに紹介し、日本の文化の理解を図る。
- (2) アメリカ合衆国の子どもの伝統的な遊びを収集しその歴史的、社会的、文化的な背景を探る。
- (3) 遊びを通して、伝統的な文化の継承の現状を調査する。
- (4) アメリカ合衆国における多民族の相互理解を図るための活動を調査し、今後の異文化理解のあり方を探る。

4 教材化の視点

私たちは、アメリカ合衆国と日本の伝統的な遊びに焦点をあて、子どもたちの異文化理解のあり方を探ろうとした。

遊びに着目したのは、大きく次の理由による。

- (1) 小学校と中学校の子どもたちの段階から、自然な形で異文化理解を図るための良い方法であること。
- (2) 遊びには、民族の歴史的、社会的、文化的な背景があり、それを知ることは、異文化理解に役立つと考えられること。

教材化にあたっては、単にアメリカ合衆国と日本の遊びの比較にとどまらないように配慮する。日米における文化のよさを相互に紹介しあい、異文化理解のこれからの望ましい

あり方を探りたいと考えた。

以上の基本的な考え方に基づいて、私たちはミネアポリスとグリーンビルでの現地調査をおこなった。パートナーのケイティ氏とヘイスティング氏の御協力を得て、大変貴重な体験と調査をおこなうことができた。

ミネアポリスでは、キッズデイケアセンターにおいて、多くの民族の子どもたちと一緒に活動する中で、伝統的な遊びを調査することができた。

グリーンビルでは、公立のボーイズアンドガールズクラブやレクリエーションセンターの指導者の方々とお会いし、文化の伝承についての考え方を長時間にわたって伺うことができた。

調査の具体的な内容は、次の通りである。

5 現地調査及びワークショップの日程と主な内容

日 時	日程・場所	主な内容	協力者
8月9日 (水曜日)	9:30 朝食会 (ミネアポリスフォートスミス)	○Bチームのパートナー ケイティ・マクドナルド先生(ヒル・マーレイ・ハイスクールの日本語の教師)に会い、これからの日程を話し合う。 ○日本に留学した経験があり、日本語も日本の文化も非常によく理解されており、これからの研修が実りあるものとなりそうで、心強く感じた。	ケイティ・マクドナルド氏
	10:00 ホテル出発 10:30 ミネアポリス キッズ デイ ケア センターに到着	○夏休みに、保護者が働いている等の留守家庭の子どもを終日預かる地域の公民館的な施設学校のある時期は、放課後に開かれる。 ○バーバラ・ソットランド先生(館専任の女性の主事)の案内で、10歳~13歳の子どもたち14名の部屋で、取材をおこなう。 ○最初に、日本の遊びを実演及び、ビデオ放映により、紹介し、実際に子どもたちと遊ぶ。 実演; ①けん玉 ②お手玉 ③ヨーヨー ④だるま落とし ⑤あやとり ⑥折り紙 ⑦おはじき ⑧こま ⑨じゃんけん VTR; ⑩茶摘み ⑪かごめかごめ ⑫とおoryんせ ⑬花いちもんめ	バーバラ・ソットランド氏

○日本の遊びについての反応は、次の通りであった。

- ①けん玉・・・全員初めて体験した遊び
- ②お手玉・・・お手玉ではなく、他のものを交互に2名で相手に投げて、返すような遊びがあるらしい。
- ③ヨーヨー・・・アメリカでよく知られている
- ④だるま落とし・・・全員初めて体験した遊び
- ⑤あやとり・・・2人あやとりは、日本と全く同じとりかた。1人あやとりは、ほうき・はしご・塔（タワー）は名称も形も全く同じ。
日本に見られないものとして、鶏の足、カップアンドソーサー（上向きと逆向き）を見せてくれた。
- ⑥折り紙・・・折り紙は、アメリカの伝統的なものではないが、最近学校で先生に教えてもらっているとのこと。
- ⑦おはじき・・・おはじきとして、使うのではなく同じ様な小石または、ガラス玉を使った他のあそびがあるとのこと。後で紹介してもらう。
- ⑧こま・・・こまは見たことがあるようであったが、紐で遊ぶ方法は、初めてのようで、喜んでいました。
- ⑨じゃんけん・・・ペーパー・ロック・シザーとかけ声をかける全く同じものがあるとのこと。やり方は、日本は宙で3種類の指真似をするのに対して、アメリカでは、左手の平の上に右手を載せ、右手で指真似をしていた。
- ⑩茶摘み・・・手合わせ遊びは、昔から大変多くの種類があるらしい。
2人、3人、4人のものがあり、どの子どももよく知っていた。

○ミネアポリスにおける各族の文化としての遊びの継承の実態について、バーバラ先生に教えていただく。

・アフリカン・アメリカンの人々の伝統的な遊びが、そのままの形で継承されながら、現在では、アメリカの他の子どもたちの間に広がっている。

マンカラ・・・現在では、商品化されている
ジャンプロープ・・・2本の縄を使って跳ぶ
・日本から伝承された遊び流行っているもの
ベンテ・・・碁盤と碁石をつかって、挟み将棋のようなルールで遊ぶ。

○ニンテンドー（任天堂）のため、屋外での遊びが日本と同じように、消えていきそうであるとのこと。ただし、親は、勉強しろといわず、外でしっかり遊びなさいという。

	<p>12:30 カフェ・ラッテにて 昼食</p> <p>13:30 レッド・バルーン書 店にて、資料収集</p> <p>15:30 「平和祭」見学 (セント・メアリーズ長崎姉妹都市主催 於セント・メアリーズ大学)</p> <p>17:30 ホテル到着 (ラックス フォート・サイト)</p> <p>16:00 ナイター観戦のため ホテル出発</p> <p>22:15 チーフミーティン グ</p> <p>24:00 チームミーティン グ</p>	<p>○教師が子どもに伝承遊びを教えることもある 時には、それを子どもが家でやると、祖父母が 知っていると言うことがある。子どもたちの親 の世代で、伝承が止まっている状況。</p> <p>○午後の打ち合わせ</p> <p>○現在の子どもの祖父母の段階で伝承の止 まった遊び、わらべ歌(楽譜・テープ)、ア リカンの伝承遊びマンカラの実物、ジャンプ ロープの実物と説明書、その他</p> <p>○長崎の姉妹都市協力した、平和への呼びかけ の催しものやイベントが行われているとのこと で、見学をした。</p> <p>○ケイティ先生が自分の高校の生徒の作った 千羽鶴を寄贈された。</p> <p>○日本の遊び紹介コーナーに、糸のついたこま ・けん玉・羽子板・お手だま・だるま落とし・ でんでん太鼓がおいてあったことから、これら の遊びは、この地域にはないものであることが わかった。</p> <p>○折り鶴コーナーでは、ほとんどのアメリカの 人々がおり方を全く知らず、係りの人に聞きな がら折っていた。</p> <p>○日本紹介の中で、細いテープを編み込んで、 動物を作る折り紙に近いものを70歳前後の日 系2世の女性が見せていた。これは、日系1世 の人たちから伝わったものであり、今も日系人 の中には伝承されているとのこと。しかし、日 本ではほとんどみられない。</p> <p>○ケイティ先生と明日の予定を確認し別れる。</p> <p>○本日の報告と連絡</p> <p>○Bチームの本日のまとめと明日の計画</p>
<p>8月10日 (木曜日)</p>	<p>9:00 ホテル出発</p> <p>9:30 サイエンス・ミュー ジウム</p> <p>(9:30~11:00 館内見学) (11:00~11:30 映画視聴)</p>	<p>○ケイティ・マクドナルド先生と本日の日程の 打ち合わせ</p> <p>○生物・物理・化学・数学・歴史などに関する ことが、易しく、具体的に説明されており、小 中学生が、すでに多数入場していた。</p> <p>○2階展示室には、モン族についてのコーナー があった。大きなタペストリー(モン族の女性 の作ったもの)には、民族の歴史が刺繍で描か れていた。モン族の伝統、生活の様子が具体的 に展示され、来館した子どもたちが楽しみなが ら理解できるように工夫されていた。</p>

12:00 昼食
 (近くのハンバーガー
 ショップにて)
 13:30 デイ・ケア・センタ
 ーを訪問

特に、コンピューターを使った映像では、遊
 びについても知ることができ、こまなど日本と
 共通のものも見られた。

○モン族の文化を大切にしながら、相互の理解
 を図ろうとする努力が感じられた。

○映画「アフリカ」を視聴する。立体映像で現
 地の自然の様子が映し出され、大人にも子ども
 にも人気があり、長い列ができた。

○ケイティ先生の自宅の近くにあるハンススト
 ックさんの家を訪問する。シャール夫人は、小
 学校の体育の教師の経験のある19歳の男の子
 と10歳の双生児の女の子の母親。

シャール・ハンスト
 ック氏

この家では、5歳～13歳までの子どもたち
 を働いている保護者の帰宅をするまで預かって
 いる。

デイ・ケア・センターについては、公営と私
 営があるが、どちらにするかは親が決定する。

○昨日と同様に、日本の伝承遊びを実演しなが
 ら紹介する。子どもたちの反応は次の通り

- ①だるま落とし②けん玉・・・両者とも始めて
 みるものばかりであったらしい。
 ③あやとり・・・よく知っている。あやとりの
 本があり、それで覚えたという。
 形は、日本のものと酷似している
 が、各形の呼び名が日本と違って
 いる。

<日本>	<アメリカ>
川	ろうそく
はしご	ヤコブさんのはしご
ほうき	魔女のほうき
その他の名称	兵隊さんのベッド 猫の目

- ④茶摘み(手あわせ遊び)・・・2, 3, 4人
 によるものを紹介してくれた。
 最後に手をたたかれた人が一人減
 ずつ減っていくものなど

○屋外での遊びをたくさん子どもたちが紹介し
 てくれた。()は日本の遊びの類似したもの
 ・ハンカチ落とし(座ってする)

○シャール夫人の話は次の通り

①学校では伝統的遊びを伝える教育活動はおこ
 なわれていない。特に、体育の時間が削減され
 たことも要因。

②教員の研修として、遊びについてはない。自
 分の知識で教えている。

③教員の文化の伝承という意識は低い。

④白人は長い年月をかけて、オリジナリティが薄れ
 ている。伝統を継承する必要感を感じない。

	<p>16:50 クリエイティブ・キッズ・スタッフ 到着</p> <p>18:00 米日協会会長宅着</p> <p>21:00 ティームミーティン グ</p> <p>22:00 解散</p>	<p>⑤家庭環境としては、今では、全く教えられていない。デイ・ケア・センターが重要。</p> <p>⑥手合わせ遊びなどは、学校でアフリカンの子どもたちから教えられたようだ。</p> <p>⑦伝承という観点ではなく、他民族の融合という点で遊びは、有意義である。</p> <p>○デイ・ケア・センターでは、異年齢集団での関わりや必要なしつけについて行き届いている印象を受けた。</p> <p>○伝承遊びのおもちゃを調査する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マンカラの原型的なものを購入 ・「ORIGAMI」と表示された折り紙の本と材料のコーナーが設置されており、最近人気が出始めたそうである。(日本製品) <p>○ホームパーティー参加</p> <p>○本日のまとめとこれからの計画</p>
8月11日 (金曜日)	<p>9:00 ホテル出発</p> <p>11:25 ミネアポリス空港発</p> <p>14:45 ワシントンDC着</p> <p>16:00 ホテル着</p> <p>18:30 ジョージタウン大学 構内見学</p>	○移動日
8月12日 (土曜日)	<p>9:00 ホテル発</p> <p>スミソニアン博物館 公文書館 歴史博物館 リンカーン記念堂 国会議事堂 アーリントン墓地</p> <p>19:00 ホテル着</p>	<p>○エノラ・ゲイ展見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカ合衆国の原爆に対する考え方を知ることができた。 <p>○歴史博物館の多民族の歴史コーナーを見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日系アメリカ人を含めた、様々な民族の歴史に触れることができた。
8月13日 (日曜日)	<p>10:30 ホテル発</p> <p>12:30 ローリー経由グリーンビルへ</p> <p>16:00 ホテル着</p> <p>16:30 トイショップ</p>	<p>○ホテル近くの大規模なトイショップ見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児のおもちゃからゲームソフトまで様々なものがあつた。 ・ビデオやゲームソフトがたくさんあり、アメリカ合衆国の子どもたちの遊びの現状を玩具を通してみる事ができたように思う。

		<p>④ 特に集団ゲームを重視している。</p> <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遊びが個別化している ・親の願いとして伝統よりも専門的な到達を期待している ・アメリカ合衆国の公立学校のダンスの指導について（ダンスの歴史的背景も含めて）、現状を伺う 	
	<p>14:00 ボーイズ アンド (~16:00) ガールズクラブ</p>	<p>○学校外での子ども達の生活と遊びの調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・このクラブは郡内でも最も大きいもので、資金は企業の財団が出している。 ・1600人の子ども達が在籍し、自由に活用しているとのこと、この日も大変多くの子ども達が夏休みの生活をしていた。 ・集団遊びやボール運動、コンピュータを活用した遊びや学習など、子ども達の興味が持続できるようにプログラムが設定されている。 	マイケル・ワグネル氏
	16:30 ヘイスティング家	<p>○日米の文化や教育についての情報交換</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヘイスティング夫妻、デイビス夫妻とともに夕食を共にしながら、日米の文化、教育、保護者の意識などについて語り合った。 ・両夫人とも、かつて来日し、米軍基地の学校で教職に就かれていたこと、また現在も小学校で校長や指導的立場で活躍されているため、日米の教育について大変詳しく説明して下さった。 	ヘイスティング夫妻 デイビス夫妻
	19:00 BARNES 小学校 (~21:00)	<p>○新年度のPTA総会前の役員会を見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デイビス夫人が校長をされている学校の役員会の話し合いの様子を見学させていただく。 ・PTAの会計報告について、活発な討議がなされていた。学校での教師の研究費として、PTAがかなり出資しているようである。 ・校舎内を見学。1年生の教室は入学前の準備がきちんとなされていた。 	デイビス夫人 (校長)
	各自のホームステイ宅		
8月16日 (水曜日)	<p>8:30 ウィルソン郡 アグリカルチャーセンター (~11:30)</p> <p>13:30 ウィルソン・ レクリエーションセンター (~16:00)</p>	<p>○ウィルソン郡内の教員研修会参加</p> <ul style="list-style-type: none"> ・主に低学年を中心とした教科指導についての研修会に参加した。絵本を使って、読みをより確かなものにしていくためのプログラムを紹介 ・講師はニュージーランドの専門家、郡の教育行政関係者などであった。 <p>○公立のリクリエーションセンターでの子ども達の活動の様子を調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文化的な活動やスポーツ、レクリエーションなど様々な活動の企画運営がおこなわれていた。 	

	<p>16:00 ショッピング街見学</p> <p>19:00 フレンドシップパーティー (~21:00)</p> <p>各ホームステイ宅</p>	<p>・施設は、広大でゴルフ場等もあり、非常に利用料が安い。</p> <p>・子どもだけでなく、成人の余暇の利用の場として活用されている。</p> <p>○大型店のなかの書店や玩具店を見学</p> <p>・最近の児童用図書等の情報収集</p>	
8月17日 (木曜日)	<p>8:50 ホームステイ宅出発</p> <p>9:00 大型マーケット</p> <p>10:00 パートン大学</p> <p>12:00 昼食会</p> <p>13:30 ホテル着</p> <p>14:00 ホテル近辺の子ども用品の店を見学</p> <p>17:00 ホテル着 チームミーティング</p> <p>21:00 チーフミーティング</p>	<p>○新学期準備用品、最近の子ども達の食生活をつかむ。</p> <p>○パートン大学校内見学</p> <p>・デイビス教授が副学長をしておられる大学の施設等を見学</p> <p>・ヘイスティング教授、デイビス教授とともに昼食をとりながら、アメリカの日常生活について語り合う。</p> <p>○現地調査の資料整理</p> <p>○活動の報告・連絡</p>	ゲバ*ス氏 (副学長)
8月18日 (金曜日)	<p>9:30 ホテル発</p> <p>10:00 ECU教育学部 コンピュータ室 (~17:00)</p> <p>19:30 ホテル着</p>	○現地調査についての報告書作成	
8月19日 (土曜日)	<p>9:30 ホテル発</p> <p>10:00 ECU教育学部 会議室</p> <p>14:00 ホテル着</p> <p>17:00 ホテル発</p> <p>17:30 ハジンス氏宅</p>	<p>○研究成果報告会</p> <p>○ファイナルパーティー</p> <p>・各チームのパートナー夫妻を中心として、グリーンビル最後のパーティーをおこなう。</p> <p>・日本のプロジェクトからは、寿可と焼き鳥の料理や、簡単な出し物を用意した。</p>	

6 調査結果

調査の結果は次の通りである。

(1) 日米両国における伝統的な遊びについての考え方

日本の考え方

- ・日本の大人たちは伝統的な遊びをする機会が減少していることを心配している。そのため、幼稚園や小学校では伝統的な遊びを積極的に授業に取り入れ、その機会を設定しようとしている。

アメリカ合衆国の考え方

- ・アメリカ合衆国では、伝統的な遊びの伝承については、それほどこだわりはみられない。現在の子どもたちの興味や教育的価値によって、伝承的な遊びが現在も続く場合もあれば、消えていく場合もあると考えている。

(2) 日米両国における遊びの現状

日米共通にみられるもの

- ・子どもたちは、帰宅後テレビ・ビデオ・コンピュータゲームなどの遊びをしていることが多い。
- ・いつも一人か少人数で遊んでいる。友だちや大人の人との会話や遊びが少ない。
- ・核家族が増え、高齢の人々から遊びを学ぶ機会は少ない。

日本でみられるもの

- ・学校の体育や生活科の授業の中で、集団遊びを取り入れた活動をしている。
- ・特に生活科では、日本の伝統的な遊びを授業の中で取り上げている。

アメリカ合衆国で見られるもの

- ・学校の体育の授業やデイケアセンター、レクリエーションセンターなどで集団で遊ぶ場が設定されている。

(3) 異文化理解としての遊びの役割

両国とも異文化理解を目的とする遊びの積極的な利用は余りみられない。

アメリカ合衆国の場合、子どもの興味や教育的価値から多民族の遊びが融合して、新しい遊びとして生まれてきている。その結果、自然な形で子どもたちは、自分と異なる民族の文化に触れてきている。

今後は、遊びを異文化理解に役立てることが可能であると思われる。

7 まとめ

日本とアメリカ合衆国の小・中学校の子どもの目を通した形で、この調査を次のように教材化したい。

(1) 日本の子ども

◎アメリカ合衆国のよさから学ぶ点

- ・単一民族としての狭い枠にとどまるのではなく、色々な民族が一緒になって行動していくことが大切である。
- ・お互いの遊びのよさを積極的に取り入れて、新しいもっとすばらしい遊びを創造していこうとする努力が必要である。

◎自分の国のよさに対する気づき

- ・自分の国の昔の人々の知恵や長い歴史を知り、伝えていくことは自分たちにとっても、また、他の人々に理解してもらうためにも、続けていくことが大切である。

(2) アメリカ合衆国の子ども

◎日本のよさから学ぶ点

- ・遊びを伝承するために学校や家庭で努力している様子を通して、多民族をより理解するためにも、遊びの歴史的・社会的・文化的背景を知ることは必要である。

◎自分の国のよさに対する気づき

- ・それぞれの民族の枠にとらわれないという自分たちの多民族相互の自然な関わり方は、これからも大切にしていきたい。